西大寺奥院骨堂調査概要

歴史研究室
建造物研究室

一

西大寺中興の祖、興正菩薩叡尊を葬つた奥院の中に、桟瓦葺切妻の小さな納骨堂がたつている。周りの壁は五輪形の板塔婆を重ねうち合せて、四方共閉ざし、南面中央に径15㎝の内外の円孔をあけ、それより納骨することになつている。板塔婆をはずさない限り、中にはいれない建物で、西大寺でも、ここ四五十年の間は中にはいつたこともないということであつた。

当研究所は西大寺の総合調査を行つてこの建物についてその意味を調べたい希望を持つていたが、たまたま元興寺極楽坊で、そこの庶民信仰資料について調査研究している伊藤久嗣・木下千珠丸二氏も同じ希望であることを知つたので、両氏の援助を得て、昭和39年9月10日より22日に至る14日間を費して調査し、この建物は鎌倉時代末に遡る可能性があり、当時の納骨堂として特殊な建物であると判定する成果を得た。こゝにその調査の概要を報告する。

二

この建物の桁に征清軍戦死者追福の卒塔婆や明治3年の記銘がある卒塔婆等が転用されているので、小屋組は明治30年前後に改造されたらしい。その時のことであるかと思われるが、外は壁の板塔婆が整理され、内部は竪の格子がうちかえられ、北に2本、東西面各1本をのこして数多かつた格子の大部分が棄てられた。もつとも南面にも格子風にうちつけてあるが、これは、そこに扉があつた時の方立であると知つた。これらの格子には、歯や骨をおさめた小さな木製の五輪小塔がうちつけてあつた。四方の柱にあるものを合せると約120基を計え、墨書銘のあることが普通で、永正・大永・天文・永祿・天正・文祿・慶長・元和の年号を読み得た。また外側周囲の板塔婆のうち、南面中央にある不動明王の描かれたものは寛永14年、内部の北側にあり阿弥陀如来絵像の比較的よくのこつているものは文祿3年、東側南寄りにあるものは承応と年号のみを読むことが出来た。

なお、建物の床は土間で、中央に五輪石塔婆の地輪をうける基礎として刳形座をもつ台石が3片に破れてはいたけれど、据えられたまゝにあることをみつけた。

三

調査して、建立当初の部材と見られるものに、柱、貫、格子、方立蹴放、小屋束のあることがわかり、それらの材料とそれにのこつた跡によつて、この建物は次のように復原することが出来た。

平面は2米26糎（約7尺）方で、土台にめぐらした布石の隅に柱を

たて、上下に厚い貫を通して固め、その間に薄い貫を、上下の貫の外面に合せてわたし、貫間隔及びそれの上下共に土壁とした。

第1図　納骨堂(正南)面

外側は東北西の3面7枚宛の厚い板塔婆を地貫（下）と腰貫（中）とに釘付けとし、内側は格子を地貫（下）と飛貫（上）とに粗く列べうちつけそれに納骨した木製五輪小塔をうち納めた

たゞ南面は納骨するために出入り出来るよう扉を設けたらしい。扉の形式はわからないが、大体は、のこつている楣・蹴放・方立によつて推定可能である。

柱の天が切られているので、高さはわからないが、現在の高さ2m35cmよりわずかに高い程度のものであつたであろう。

小屋及び屋根については、わずかに棟束が残つているのみで、桁・梁にはもとの材料が見られないにせよ、今のように切妻であり、瓦葺であつたであろう。たゞ桟瓦葺ではなく、本瓦葺であつたと推定してよい。

四

この建物のことを、西大寺では骨堂と呼んでおられる。その呼び名の如く、納骨した木製五輪小塔をうちつける施設としての、いわゆる納骨堂で、打ちかえられていない永正の銘を有する五輪小塔によつて、この建物の存在の上限を一応、その頃におくことには誤りがない。

たゞし、柱が大面取になつているのはその限りをさらに遡るものであること、中央五輪石塔の座の刳形曲線が、こゝ奥院の本体である興正菩薩墓塔のそれに通じ、同じ院内墓地に見られる文禄3年銘のあるものと異つていることを考え合せて、かなりさかのぼらせることが出来るのではないかと予想する。

さらに、この墓地に関する文献である「勅謚慈真和尚宣下記」によれば、今の骨堂の位置に、その名で呼ばれる建物のあつたことが知られる。ゆえに、永正より以前に何等かの都合でたてかえがなければ、建物の建立年時を、その記事の嘉暦4年にまで遡らせることが可能となろう。

（杉山信三）

第2図　内部五輪塔(亡失)の台座

追記　室町時代末の紀年銘を有する周囲の板塔婆と木製五輪塔についても精細な調査が必要と感じたが今回はその建築を明らかにするに止めた。なお調査を許された西大寺当局と調査斡旋の労をとられた元興寺極楽坊住職辻村泰円師とに感謝の辞をささげる。